

# 名勝滴翠園

## —描かれた庭園—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 調査で確認した船着場の階段(南東から)

はじめに てきすいえん 滴翠園は西本願寺境内南東に造られた名勝庭園です。京の三名閣の一つである ひうんかく 飛雲閣は庭園の南東寄りに建っており、北東に鐘楼、北西に仏飯所、その他は築地塀等に囲まれています。「滴翠」とは「したた滴るみどりような翠」という新緑の季節を表す季語とされ、茶の湯の世界などで使われています。名勝「滴翠園」はその名の通り、年間を通して緑が美しい回遊式庭園です。

本願寺は天正19年(1591)に豊臣秀吉から寺地の寄進を受け、大坂天満から現在地(堀川七条)へ

遷移してきました。『洛中洛外図(田万家本)』(元和3年(1617)以前)や『洛中洛外図(萬野A本)』(寛永2年(1625)以降)には、敷地南東の庭園内に2層楼閣や池、築山、鐘楼などが描かれています。これらは現存の建物や池等と似てはいるものの異同は明らかになっていません。また庭園の造営時期や飛雲閣の新築または移築説についても不確定です。初期の庭園施設は前述した資料以外からも知ることができますが、その後に改修されて現在に至っていることも絵画資料から明らかとなっています。

**巻物の中の庭園** 江戸時代の庭園の姿を知る代表的な資料として『滴翠園十勝』<sup>\*</sup>があります。庭園の修理が本格的に進められ、現状に近い景観へ整えられた明和5年(1778)頃に作成されました。庭園の見所となる10箇所についての詩文と共に、敷地内を南西から反時計回りに一周する構図で、約12.5mの巻物に風景が描かれています。詩文の付けられた十勝とは飛雲閣、そうろうち滄浪池、りゅうはいきょう龍脊橋、とうかう踏花塙、こちやうてい胡蝶亭、しやうげつ嘯月阪、おうかくだい黄鶴台、えんせつりん艶雪林、せんみんせん醒眠泉、せいれんしや青蓮樹(澆花亭)を指し、前掲7箇所が東側の庭、残り3箇所が西



写真2 船着場から滄浪池と飛雲閣を見る（北西から）



写真3 護岸石裏側から見つかった古い護岸石（北から）

側の庭にあり、現在もそのほとんどを鑑賞することができます。

**庭園の現況** それでは、現在の庭園内部に目を転じてみましょう。中央部には高さ0.3 m程度の土塁が残っているだけですが、もともと東西を仕切る塀などの施設があり、これを境に意匠の異なる景観が広がっています。東側は飛雲閣を中心とする池庭、西側は泉や茶室を中心とする露地で構成されています。

**発掘調査とその成果** 平成8年から14年にかけて行なった東側庭園の調査では、池の護岸石や橋の修復を主目的として、絵図に描かれた船着場や築山構築土の確認等を行ないました。

飛雲閣には舟入の間があり、池から石段を上って建物に入ることができます。対岸の池北西部には、船着場とみられる花崗岩切石の階段状石組が確認できました。絵図を確認したところ、池へ降りるこ

とのできる階段が造られていたことが分かります。調査の結果、3段分の石段と6個の踏石が築造時の位置を保った状態で見つかりました。踏石は長軸を南北に4石、東西に2石が揃った状態で出土しました（写真1・2）。絵図では互い違いに向きを変えて並べられており、後世に並べ替えられたようです。また、周辺の景石の中でも池底に据えられていたものはすべて近現代に動かされていたことが明らかとなりました。明和年間以降に据え付けられた護岸石は旧堆積土の上に据えられていたことから、それ以降に堆積した土を除去する過程で据え直しと組み直しが行われていたことが分かりました。一方、護岸石の裏側にあたる陸部の土の中からは古い護岸石が見つかりました。これらには巨石が使用されており、そのためか傾倒が見られず、池底にしっかりと据えられた状態で見つかりました

（写真3）。これら古い護岸石は、明和期またはそれ以前のものの可能性があります。その他、築山は近現代に盛土が行なわれて嵩上げされていましたが、下層に古い築山が良好な状態で残っていることを確認しました。

また、庭園整備にともない池の水位について見直しを行ないました。船着場最下段の葛石の位置から、整備前の水位が明和期の水位より約0.15 m高かったことが判明し、是正されることとなりました。

**おわりに** 明和年間以降、小規模な修復を繰り返し行ないながら大切に守られてきたことが明らかとなり、修理の度に追加された新しい要素があったことから、庭園の複雑な修理の歴史を改めて認識することとなりました。

（近藤奈央）

※『滴翠園十勝』は龍谷大学図書館の所蔵で、貴重資料画像データベースにて公開されています。